首都圏で広がる貨客混載 高速船や路線バスも

#東京 #千葉 #埼玉

2022/6/21 19:00 [有料会員限定]

東海汽船は3月に伊豆諸島の大島と東京・竹芝を結ぶ高速ジェット船を活用した貨客混載事業をスタートさせた

バスや電車の空きスペースを活用し、乗客と一緒に荷物を運ぶ「貨客混載」の取り組みが首都圏で広がっている。新幹線や高速バスでの輸送にとどまらず、路線バスや船の定期便など、利用する交通機関も多様になっている。沿線・周辺の人口が減少し、乗客の運賃収入による利益確保が厳しくなる中で、各社とも新たな収益源として期待している。

伊豆諸島の大島から東京・港区の竹芝まで最短1時間45分。高速ジェット船が、大島の港で水揚げされた生きのいい伊勢エビを届ける。出張先の大島で急に必要になった書類を運ぶこともある。

東海汽船が3月に始めた小型の荷物輸送サービス「はこぶね便」。高速ジェット船の客室の空いたスペースに荷物を載せて運ぶ。荷物1個あたり2000円で、昼ごろに受け付けても、午後の便でその日のうちに届けられる。受け渡しは船の発着場のみだが、竹芝港から東京駅まではタクシーで10分ほどとアクセスが良いことも売りだ。

これまで大島から本州へ荷物を送るには宅配便しかなく、到着も翌日以降だったという。「新幹線で朝どれ野菜を運んで、その日に駅で売る鉄道会社の取り組みを知り、船でもできると思った」と東海汽船の担当者はサービス開始のきっかけを打ち明ける。

「島にはコンビニもファストフード店もない。ケーキなどの賞味期限の短いものを島に運べば島民も喜んでくれる」と担当者。現在は個人の利用が中心だが、商業利用にもつなげていきたい考えだ。

トマトに長いも、ホウレンソウ。地方から産地直送で野菜を送り駅ナカで販売している=JR東日本提供

JR東日本が新幹線の空きスペースで地方の野菜などを運ぶ「はこビュン」の利用も、2017年の開始から順調に伸びている。在来線特急の活用も始めており、駅ナカの通路や店舗を使って地方の名産品が買える「駅マルシェ」も定期的に開催している。地方特産の新鮮な農産品を買いたいニーズは強く、地方自治体からの問い合わせも多いという。

京成電鉄は3月から通勤電車で野菜を運ぶ実証実験を週に1回程度実施している。京成佐倉駅（千葉県佐倉市）から成田空港駅（同県成田市）まで運び、空港内のグループのレストランで提供している。運搬手段をトラックから列車に置き換えることによる二酸化炭素（CO2）の排出削減効果も計測中という。

同社傘下の京成バス（千葉県市川市）も鮮魚を運ぶ実験をしている。漁港のある千葉県銚子市内から東京駅八重洲口まで、名産のキンメダイなどを運んでいる。

東急バスは横浜市内で路線バスを活用した貨客混載事業に取り組む

東急バス（東京・目黒）は4月から、横浜市内の路線バスでパンの輸送を始めた。パン製造販売のプロローグ（横浜市）が作ったパンを1日1回、製造拠点の近くにある保木停留所（同市青葉区）から、店舗近くの東急田園都市線たまプラーザ駅（同）まで届けている。

バス内の荷物置き場にパン運搬用の箱を5つほど積み込む。東急バスの担当者は「空きスペースの有効活用につながっている。収益源として育てたい」と期待する。店舗側も「輸送にかかる人手や時間の削減につながる」としており、東急バスはエリア拡大も視野に入れる。

埼玉県秩父市は高齢化が進む山間部で貨客混載の仕組みを活用するため、路線バスを使った実証実験を進めている

急速な高齢化が進む山間部の自治体では「貨客混載が地域課題の解決策になるのではないか」と期待する向きもある。埼玉県秩父市は20年11月から、鉄道やドローン（小型無人機）、自動搬送モビリティー（移動手段）などを組み合わせた物流や交通のスマート化実験に取り組んでいる。

このうちの一つが路線バスによって乗客と地元の新鮮な野菜を同時に輸送する貨客混載だ。実験は21年11月に4日間実施した。秩父市内の約12キロを軽車両や路線バスで結び、乗客とともにリンゴやサツマイモなどの野菜を輸送した。道の駅大滝温泉（秩父市）で直売した野菜は翌日までに完売したという。

22年度からは山間部で大手物流業者による共同搬送システムを構築し、バスの貨客混載を組み込む計画もある。市の担当者は「共同配送を支える仕組みとして活用できるよう検討したい」と話している。